

語り継がれるもの その9
 —パプアニューギニア・フォイの口頭伝承—
Things Handed Down Part 9:
Oral Traditions among the Foi in Papua New Guinea

槌谷 智子
TSUCHIYA Tomoko

無文字社会であるフォイには数多くの口頭伝承があり、それを通して彼らの世界観が継承されていく。本論では、人喰いと関連した伝承を取り上げる。その存在は悪を体現するものというより、もっと複雑なものである。物語の展開においても、人喰いは絶対的悪として退治されてハッピーエンドに終わるのではなく、動植物に変身したり、逆に人間が殺されたりする結末もあり、混沌としている。物語の展開は予定調和的には進まない。人間と人喰いは対立するだけでなく、複雑に交錯する。善と悪の二項対立的世界観とは異なるフォイの世界観がこうした伝承に見出されるのである。

キーワード：口頭伝承、世界観、人喰い、フォイ、パプアニューギニア

1. はじめに

本論の目的は、パプアニューギニアに暮らすフォイの口頭伝承を通してフォイの世界観を探求することにある。無文字社会であるフォイにおいては、数多くの神話や物語が口頭で伝承されている。伝承を聞くことは人々の楽しみであると同時に、それを通して彼らの世界観が世代から世代へと継承されている。

フォイは、南部高地州南端の熱帯雨林地帯に居住する人口約5,000人のフォイ語を話す民族集団である。フォイは居住地域によって、フォイ自身によって3つの下位集団が認識されている。筆者が調査対象とするのは「低地フォイ」と呼ばれる人口約540人の集団で、ムビ川下流域の7つのコミュニティに暮らしている。

口頭伝承は、1992年から2014年にかけて実施した計30ヶ月間の現地調査で収集した。これまでもフォイの伝承を発表してきたが（槌谷2012～2018、2020、2021）、本論はその続編にあたるものである。2012年～14年はヘビと鳥の伝承、15年16年は父系出自集団に関連した伝承、17年は異界と禁忌の土地にかかわる伝承を取り上げた。19年は太陽、月、川などの創世神話、20年は動物にかかわる伝承を分析した。今回は人喰いあるいは殺人鬼と関連した伝承を取り上げる。これまでの論文の伝承に出てきた「キエイメナ」「カブドゥ」と呼ばれる人物は悪人でありながらも、憎めない人物あるいはトリックスターの存在でもあった。しかし、今回は人喰いとして登場するキエイメナとカブドゥに焦点をあてる。

2. 民族誌的背景

フォイの社会組織の基礎は父系出自集団のクランである。各コミュニティは2～5つのクラン成員によって構成されている。婚姻は一夫多妻制である。川のほとりにあるコミュニティは、男性たちが共同で寝起きするロングハウスを中心にして、その両側に妻と子供たちが暮らす複数の家屋が立つ。川岸に家屋を建て、周辺は山や熱帯雨林に囲まれているため、他のコミュニティとの往来、農作業や狩に行くにもカヌーが利用される。家屋は雨季の洪水で浸水しないように高床式になっている。階段を上った戸口の前に小さなベランダがある。内部には複

数の炉がある。一つの炉をその両側の二人が利用して、そこで食事をし、眠る。かつては、一つのロングハウスの中を壁で男女の空間に分けて暮らしていた。本論の伝承で語られるのは、そうしたロングハウスである。現在も出作り小屋はそうした形式になっている。人々は、遠方の農作業や狩猟のための出作り小屋とロングハウスのある村を往来して生活している。

1年は雨季と乾季に分かれるが、1年を通して降雨量が多い。フォイは農耕、狩猟採集、川での漁撈による自給自足の生活をしている。狩猟では、野生のブタ、クスクスなど各種有袋類の動物、ヘビ、コウモリ、各種の鳥などが弓と槍で捕獲される。ブタやヒクイドリなど大型の獲物は、焼いた石を利用して地面で蒸し焼きにされる。内臓は竹に入れて焼いて食される。粗放農耕による菜園は長期間利用できない。新しい菜園を作るためにブッシュの木を切り倒すのは男性の仕事で、植え付けと手入れは女性が行う。各種の青菜、キュウリ、ピットピット、各種果実などを栽培している。主食となるのは、サゴヤシから採集されるデンプンである。サゴヤシを切り倒すのは男性の仕事で、サゴヤシからデンプンを採集する一連の作業は、女性の仕事である。サゴヤシの髓をハンマーで砕き、それをバスケットに入れ、水を注いで絞る、デンプンが沈殿するのを待つ。サゴデンプンは女性が保管し、料理する。調理は大型獣を除いて、すべて竹筒に入れて炉にくべて焼かれる。竹は鍋と皿の役割を果たすばかりでなく、水を入れておく瓶の役割も果たす。採集した竹や作物、薪、狩の獲物は網袋に入れて運ばれる。赤ん坊を運ぶのにも利用される網袋は、丈夫で大きな袋で、日



<写真1 サゴヤシの髓をハンマーで砕く女性>

常生活になくなくてはならない。

女性は樹皮の内皮を叩き延ばして作る樹皮布を頭からベールのように被る。現在は布スカートをはいているが、かつては腰みものをつけていた。男性は祭礼の時には、特別な装束に着替える。木のベルトに樹皮布の前掛け、後ろに赤いコと呼ばれる葉、腕輪、足輪、頭飾りをつける。

フォイでは、人間は二種類の霊 (*ho*) を体内に持っている、死後も霊は存在し続けると信じられている。心臓に宿る霊は死後川を下り、死霊が暮らす海岸へ行くと考えられている。もう一つの目の中に宿る霊は、死ぬ間に身体から抜け出て、自分のクランの土地にある大木、洞窟、川の渦巻きへ行くと暮らすと言われている。また、人間だけでなく自然界のさまざまなものには霊が宿り、いろいろな場所に霊が棲んでいると信じている。

現在はキリスト教の布教によって土葬をするようになったが、それ以前は風葬だった。ブッシュに柵を作り、そこに遺体を置いて、火をたいて腐敗を早め、骨になるとコミュニティの近くの祠に一時的に納める。最終的には、骨を収める儀礼を行った後、親族集団の土地の中にある遺骨を納める洞窟に持って行く。伝承「3-3」でソソアカの死体を焼くとあるが、これは普通の人間には絶対にしない遺体の処理方法である。

3. フォイの口頭伝承

以下5編の伝承で、筆者が補足した言葉は [] に入れ、説明は () に入れた⁽¹⁾。擬音語、感嘆語はそのまま記述すると状況や感情が伝わり難い場合には、日本の表現に置き換えた。元の擬音語・感嘆語は () に入れて併記した。フォイの伝承の語り方の特徴として、何度も反復して語られる部分がある一方、話が突然飛んでしまうことがある。繰り返しは一部省略し、補足が必要と判断した部分は [] に入れて加筆した。話の流れが前後してわかり難い場合には、筆者の判断で入れ替えた部分がある。「カブドゥ」は訳さずにそのままにした。直訳すると「黒い女」で、時には人を殺したり食べることもある。カブドゥと対になるのがキエイメナで、直訳は「悪い男」だが、これも「キエイメナ」とした。「ソソアカ」は霊的存在で「人喰い女」「女の悪霊」にあたる

が、これも「ソソアカ」とした。「アメナ・フノボ」は男の殺人者だが「殺人鬼」と訳した。フォイでは誰かに話しかける場合、呼称を最初に言うことが多い。初めて会う人に「兄弟よ」「義理のお父さんよ」と呼びかけることがあるが、これは親族ということではなく、親しみを込めた呼びかけである。妻から夫への呼びかけは「あなた」、夫から妻への呼びかけに「おまえ」、大人が男の子に呼びかける呼称は「おまえ、ほうず、ほうや」など場面に応じて訳し分けた。「ugubi ma'a」は「少年、青年、若者」とした。「ka sabora」は「娘、少女」と訳した。⁽²⁾

3-1 バジ鳥 (語り手：カラゴカ)

あるところにお母さんと若い息子、犬が住んでいました。大きな犬が4匹いました。犬を連れて狩に行き、ヒクイドリ、ブタを弓矢で射って、それを石蒸し焼きにして食べて暮らしていました。

ある日の朝、寝ていると床下からササササ・・という[風の]音がして、トントン(キリキリ)という足音が聞こえたので、こっそり床下を見ると大きなカブドゥがコイバ(石を棒にくくりつけた武器)を持ち、網袋を背中に担いで、家に上がってきました。カブドゥは「まあ(アイー)、子供とお母さんが暮らしているのですね」と言いました。母親は「ええ、そうです」と言って、置いてあったヒクイドリやサゴをカブドゥにあげて一緒に食べると、カブドゥはこう言いました。「お母さん、畑を作りたいのですが、木を切ってくれる男の人がいません。あなたの息子さんが切ってくれたらと思うのですが、連れて行ってもよろしいでしょうか」。お母さんは断りました。「子供が二人いれば、一人連れて行ってもいいと言えますが、一人しかいないのでそうはいかないんです」。しかし、カブドゥは「いいえ、三日後に息子さんを連れに来ようと思います。絶対連れて行きます」と言い、二人は言い争いになり、カブドゥがお母さんを殺して食べると脅しました。お母さんは「わかりました。連れて行きなさい。三日後に連れに来なさい」と言いました。少年は石斧、弓、矢を一束おろして、準備しました。

そして、[三日後に]カブドゥは少年を連れて行きました。カブドゥが先に、少年が後ろからついてどんどん歩いて行きました。家の近くに着き、カブドゥは「ほうや、今晚食べるものがないから、山の上の大きなサゴが生えているところに、卵を抱えている鳥がいるので射ちなさい」と言いました。少年は弓矢を持ってカブドゥとそこへ行き、鳥を射ち落とし、別の鳥を射ち落とし、鳥をカブドゥに渡して進んで行きました。歩きながらカブドゥを見ると、カブドゥは鳥の羽をむしりとり、生で食べていました。口の周りは血だらけでした。少年は怖くなりました。そして、カブドゥの家に着きました。戸を開けて中に入り、カブドゥは「ほうや、そこに座りなさい。私は夕食の青菜やサトウキビを取りに行ってきます。あなたはここに座っていなさい」と言って、青菜などを集めてきました。竹に入れて焼き、少年にくれました。それを食べて、寝ました。

翌朝、食べ物を二人で食べてから、「ほうや、私の畑の木を切りに行きましょう。あなたの弓矢はここに置いて行きなさい。木を切るための石斧だけ持って行きなさい」とカブドゥは言いました。「はい」と言ったものの、弓矢を持って出かけました。[遠くて]疲れたころ、ようやく着きました。カブドゥは「新しく作る畑はここです。あなたはここにいなさい。私はハリネズミ(*kuma'ae*)⁽³⁾の罫を見に行きます」と言いました。少年は残り、カブドゥは出かけました。西の方から何か音がするので耳をすますと、「カルカルカル・・」と大きなブタの鳴き声が聞こえてきたので怖くなって、弓矢を構えて見下ろすと、ブタが匂いをかぎながらやってきたので、少年はブタの脇の下を弓矢で射ちました。ブタを射ったら、それは男でした。カブドゥの夫がブタに変身していたのでした。カブドゥにブタに変身して少年を食べに行けと言われてやってきて、少年に射られてしまいました。「ウアー(アガエー)、私は死ぬ・・」と言って死んでしまいました。その声を聞いて、カブドゥが「あなたー」と叫びました。カブドゥに殺されると思い、少年は逃げ出しました。来た道を引き返し、どんどん行くと、夜だったので寝て、また歩き、歩き、歩き疲れたころ、ようやく自分の家に着きました。お母さんが一人でいました。「お母さん、こうこう、こういうことがあって帰ってきました。殺されそうになって逃げってきました。お母さん、カブドゥが僕たちを殺しにやってきます」。武器を[棚から]下ろして、さらに言いました。「お母さん、カブドゥ

に二人では勝てないよ」。

翌日夜明け前に、少年は逃げ出しました。「お母さん、一緒に逃げよう」と言いましたが、母親は「いいえ、私は行かない。ここにいる」と言うので、一人で逃げました。途中で、家の方からドゥルルルという音がしました。「エー、カブドゥがお母さんを食べてしまったに違いない」と少年は思いました。少年は、逃げました。どんどん逃げて、疲れたころ、西の方に大きな家が建っていて、大きな男がいました。「どうしたんだい？」と聞かれたので、少年はカブドゥのこれまでのことを説明しました。「カブドゥが殺しにくるから、逃げて来ました」と言うのと、「カブドゥとは何者だ。大きいのかそれとも小さいのか？」と聞くので、「大きいです」と答えました。少年はそこで石蒸し焼きにした獲物を食べて寝ました。

翌朝、少年が行こうとすると、男は「どうして行くんだ。カブドゥが来たら、殺してやる。行くな。ここにいろ」と止めました。少年は「いいえ、ここにはいられません。行きます」と出かけ、「お兄さん、カブドゥは我々を皆殺しにします」と言いましたが、「おれは男だ。殺してやる」と残りました。少年は一人で出発しました。そして、家の方からルルル・・という音がしました。カブドゥがやってきて男を食べてしまったのだと思って、逃げました。疲れたころ、西の方に家が建っていました。美しい青年がいました。「どうしたんだ？」と聞かれたので、「カブドゥが私の母を食べ、私が逃げて行ったところの男を食べたので、食べられないように逃げてきました」と話しました。すると、彼は「心配するな。我々が殺してやる。忘れて、寝よう」と言いました。少年はそこに座り、青菜やヒクイドリ、ブタなどを料理してくれたので、それを食べ、いろいろ話をして寝ました。

翌日、食事をして、出発しました。少年が「私と一緒に行きましょう。カブドゥが食べにくるので、逃げましょう」と言うのと、青年は「心配するな。行ってはいけない。カブドゥは我々が殺すから、ここにいなさい」と言いました。「いいえ、ここにはいられません。私は行きます」と言って出かけました。途中で、家の方から音がしました。「ああ、カブドゥに青年は食べられてしまった」と思い逃げました。どんどん逃げて疲れたころ、畑があり小さな家がありました。家に入って行くと、老人が一人そこにいました。白髪の老人でした。「おまえは人間か？」と聞かれたので、「はい、そうです」と言うのと、「どうしてここへ来たんだ？」と聞かれ、少年は「カブドゥは私が泊まったところの人を全部食べてしまったので、食べられないように逃げてきました」と話しました。老人は「ここにいなさい」と言い、二人は話をしました。「おじいさん、カブドゥが私たちを食べてしまうから、あなたの家に泊まることはできません。泊まったら殺されます」「行ってはいけない」「私を食べ、あなたを食べ、二人とも食べてしまうでしょう」「心配するな」と二人はいろいろ話をしました。老人は料理し、サゴと肉の石蒸し焼きを少年にくれました。食べ終わり、タバコを吸っていると、大雨が降ってきました。ドロゲ、ドロゲと降ってきました。二人はまた「カブドゥが来るから逃げる」「行ってはいけない」と話をしました。老人が「下を見てごらん」と言うので見ると、大きな牙のある犬がいました。老人は「明日カブドゥが来ても、ここにいなさい」と言いました。二人は寝ました。

翌朝、大雨でした。昼になってもザーザー（ドロゲ、ドロゲ）と降っていました。少年は「おじいさん、カブドゥがやってくるよ。私たちを食べてしまうよ」と言って泣きました。老人は「泣くな。ここにいなさい」と言いました。下の方からトントン（キリキリ）という足音がするので、下の道を見ると、カブドゥが石斧を持って人間を食べようとやって来ました。二人がいる家へとやって来ました。少年が逃げようとするのと、老人は「行ってはいけない。ここにいなさい」と止めました。家の下に寝ていた大きな犬は、クアーと吠え、カブドゥの体を噛み、カブドゥは死にました。そして、カブドゥの骨も髪もすべて食べつくしてしまいました。老人は「だから、行ってはいけないと言ったのだ」と言いました。そして、二人は一緒に暮らしました。

ある日、老人は「ぼうず、犬を連れて、山へ狩りに行きなさい。弓矢もここにある。バスケットもここにあるから持って行きなさい。クスクス、ブタ、ヒクイドリが獲れるだろう。プッシュに泊まって、クスクスなどを獲って食べて、家へ戻ってきたくったら帰ってきなさい」と話しました。そして、少年は犬を連れて出かけて、ク

スクス、ヒクイドリ、ブタを獲り、それを食べ、さらに犬を連れて狩をして、大きなヒクイドリを殺しました。さらに、東へ行ってスクスなどを獲って、ブッシュで寝ました。そして、家へ帰ることにしました。犬が先に歩いて行きました。スクスやヒクイドリを獲って、老人のいる家へ帰りました。獲物を石蒸し焼きにして、サゴを竹に入れて焼いて食べ、お腹いっぱいになりました。老人は「寝てはいけない。起きていなさい」と言って、タバコを吸っていろいろな話をして、真夜中を過ぎました。やがて眠くなり、老人も少年も眠ってしまいました。下に寝ていた犬がやってきて、少年を食べてしまいました。

朝、老人は少年がいないことに気づきました。床下の犬を見ると、腹が大きく膨れていました。老人は石斧で犬の頭を打って殺しました。喉を切ると、首から下がコロコロ（アネネ、アネネ）と落ちていきました。犬の頭も転がって、クラゴの木が生えているところでモマボ（着生ラン）になりました。老人は泣きました。老人は泣きながらバジ鳥になってコアエ、コアエと鳴きながら飛んで行きました。犬はモマボになってそこにいます。

3-2 ソソアカ （語り手：カロマユ）

あるところに大きな村がありました。ある日の夕方、一人の男がウシ鳥がいるところへ捕まえに出かけました。ブッシュの奥へと進んでいくと、道に大きなボラの木が生えていました。ボラの木の上で「ブルルル」という音がしたので、木のてっぺんを見ると、赤い布を頭にまとった女がボゲ（棒の武器）を持って下りてきました。木をまるで地上を歩くように歩いて下りてきました。美しい娘でした。彼女は聞きました。「どこへ行くの?」「ウシ鳥を見に行くのです」と答えると「そう（エー）。一緒に行きましょう」と言いました。二人は「鳥のいるところへ」着くと、「あなたはここにいなさい。私はウシ鳥を射ちに行きます」と若者が言って、射ると、[鳥は]ケケケケと落ちてきました。それを少女にあげると、少女は「私の家に一緒に行って、この鳥を料理して食べましょう」と言いました。二人はボラの木のところへ戻り、若者におぶさるように言って、木に登ると、木のてっぺんにはすばらしい土地がありました。登ってきた木は消えてしまいました。素敵な家が建っていました。家の中には男と女の部屋がありました。家の中に入り、持ってきた鳥を「あなたが食べなさい」と若者は言いました。少女は鳥を食べました。家にはスクスなどが置いてあり、それを若者にくれました。若者は食べて寝ました。夜、若者は少女が人間の心臓をコアエの赤い葉にくるんで火に置いて料理して、食べているのを見ました。

翌朝、少女は若者に下を見るように言いました。下を見ると、若者の村が見え、一人の赤ん坊が川の中に沈み、人々が死体を引き上げていました。少女は若者にここにいるようにと言って、一人で降りていきました。そして戻ってきましたが、エゲー、赤ん坊の肉の一部を切り取って持ち帰っていました。若者は少女が肉を竹筒に入れるのをこっそり見ました。少女はそれを食べ、若者にはスクスの肉を料理してくれました。

少女は夫にサゴを料理してあげ、二人はそれを食べて暮らしました（夫婦となって暮らしました）。[ある日]彼女は人間の心臓を赤い葉にくるんで料理して食べました。翌朝、下を見るようにと言うので見ると、エゲー、彼のお兄さんが死んでいました。彼女は「あなた、もしお兄さんを悼みたいなら、会いに行きなさい」と言いました。「わかった」と彼が行こうとすると、彼女はこう話しました。「あなた、行くの?お兄さんの遺体のそばに私と似た女を見るでしょう。でも、何も言うてはいけません。食べ物もあげてもいけません。遺体の周りにはたくさんの女たちの中に私の顔を見るでしょう」。梯子を下ろし、若者に下りるようにと言いました。下りると彼女は梯子を引き上げ、こう言いました。「戻ってくる時にはボラの木のところに来なさい。この梯子を下ろしますから」。[村に帰ると]お兄さんの遺体が置かれていました。そして「若者は」泣きました。夜、アエー、妻がやって来て遺体のそばにいました。しかし、何も言いませんでした。その女が死体を切り取るのを見ました。夜明けになると、妻はいなくなっていました。棚を作り、遺体をそこに置きました。そして、青年は帰りました。ボラの木のそばに行くと、木に梯子が下りていて、それを登って行きました。家に帰ると妻は料理していました。夫は妻が料理したものを食べ、スクスなどを獲り、そうして暮らしました。そうこうするうち、また妻は心臓

を赤い葉に巻いて料理し、それを食べました。

翌朝、下を見ると、エー、お姉さんが死んで遺体が置かれていました。「お姉さんを悼みにいきますか？」と言うので、「ああ」と言うと、「私もそこにいるでしょう。私も他の女性たちと悲歌⁽⁴⁾を歌いに行きます。お姉さんの遺体に会いに行きますが、私に何か言ったり与えたりしてはいけません」と言いました。「わかった」と言って、彼は梯子を下りて行きました。姉の亡骸を見て泣きました。夜になり、エゲー、妻がやって来て、遺体のそばに座っていました。妻には話しかけず、食べ物もあげませんでした。人々は夜通し泣き、夜明けになると妻はいなくなっていました。翌朝、死体を柵に置き、帰ろうとすると、姉の娘と一緒に行きたいと泣きました。若者が木のところに行くと、姪はついて来ました。少女には梯子が見えませんでした。若者が登って行っても、少女には梯子が見えず「登ってこないの」、彼が戻ると「どこへ行くの?」と姪は言って木の下で泣きました。若者は妻に「私の姪がこうこうで下にいて泣いているので、連れて来たい」と言うと、「それなら、連れに降りて行きなさい。梯子を降ろすから二人で登って来なさい」と言いました。夫は梯子を下り、姪の手を取って登り、家に連れて行きました。そして、一緒に暮らしました。

ある日、姪は病気になり家に残っていました。妻はサゴデンプンを作りに出かけ、夫は犬を連れて狩に出かけ、2匹クスクスを捕まえ、さらに狩を続けました。犬は獲物を見つけて吠え、獲物を射ちました。夫は射ち損ない、さらに続けて射ち損ない、姪が死んだのだろうかと思な予感がして帰ってきました。姪は樹皮布をかぶっていました。布をめくってみると、アイツ、肉が食べられていて、骨だけが残っていました。そして、肉の食べかすがその辺に散らばっていました。彼は妻がサゴを作っているところへ行くと、妻の口は血で赤く染まり、口の周りに肉の食べかすがついていました。彼は家に帰り、[男女の部屋の間の]壁に穴をあけました。妻が座った時に脇の下にくる位置に、槍を射つために穴をあけました。姪のことを想って泣いていると、妻が帰って来て、サゴデンプンを入れたバスケットをおろし、菜園へ行ってセゲナボ⁽⁵⁾を抜いてきました。ソソアカは片手に1枝を、もう片手にもう1枝を持ち、家に帰り、夫のところへ行って、

ana kamabu tibubia (お姉さんのことを悲しんでいるの?)

wame kamabu tibubia (お兄さんのことを悲しんでいるの?)

ana kamabu tibubia (お姉さんのことを悲しんでいるの?)

wame kamabu tibubia (お兄さんのことを悲しんでいるの?)

と言いながら、セゲナボで夫を叩きました。繰り返して叩き、夫はあまりの痛さに気を失って倒れましたが、間もなく目を覚まして、起き上がってしばらく座っていました。妻がサゴデンプンを竹に入れ、クスクスなどを竹に入れて料理しているところを、弓で脇の下を射つと、妻は家の下に飛び下りました。若者も家の下に下り、梯子を取って、[地上へ]下りて行きました。妻は天空にとどまり、若者は地上に下りると梯子は消えてしまいました。

3-3 ソソアカ (語り手: カロマユ)

昔々、若い夫婦がいました。二人には、男の赤ん坊が一人いました。大きなロングハウスがあり、真ん中を壁で区切って、片側に男たちが、もう片側に女たちが住み、それぞれの部屋に3つずつ炉がありました。壁に近い炉の横に若い夫は寝ていました。

ある晩、真夜中に夫が竹筒に入れた水を飲んで「おまえ、空になった竹筒を取りに来い」と言うと、妻が[壁の近くに]来ました。夫は妻に言いました。「おまえ、これからサゴ幼虫(サゴヤシにいる甲虫の幼虫)を採りに行こう」「わかりました」。妻は女の部屋に暮らし、夫は男の部屋に暮らしていました。妻は樹皮布で顔を覆っていたので、顔は見えませんでした。弓矢と焼いたサゴを持って出かけました。夫はカヌーに乗り、妻を待ちました。妻は樹皮布で体を覆っていたので、足しか見えませんでした。妻は結婚したばかりなので「恥ずかしくて」そうしているのだろうと考えました。妻はカヌーの前方に座り、夫は後ろに立って櫂で漕ぎ始めました。夫



<写真2 サゴ幼虫>

は先に「カヌー」降りて、出作り小屋に着きました。縄で「木をこすって」火をおこして薪をたいて妻を待ちました。タバコを吸って待っていると、妻が女の部屋へ入ってきて、赤ん坊が泣いていました。夫が「おまえはサゴ幼虫を採りに行きなさい。[乾燥しないように] 川の中に置いたアス（掘り棒）で幼虫を集めなさい」と言うと、「私のアスはどこですか?」と聞くので、「エー、川上に置いただろう」と言うと、「そうでしたね」と言いました。夫は大きな網袋を手に取り、タバコを吸いながら「幼虫を採って帰ったら、サゴを料理しておいてくれ。私も夕方には帰ってくるから」と言って、獲物の罾を見に行きました。そして罾のクスクスを捕まえました。あちこちに仕掛けた罾でたくさんのクスクスとヒクイドリ1匹を捕まえて帰る途中、ハリネズミの巣を見つけました。生きたハリネズミを捕まえて帰ってくると、まだ妻は戻っていませんでした。「エー、急いで幼虫を採って帰ってくるように言ったのに、いないじゃないか」。薪で石を焼き、クスクスの内臓を取り出し、ヒクイドリの毛を取って内臓を取り出し、石蒸し焼きにし、内臓は竹筒に入れてサゴと一緒に炉で焼き、すべて終わり、妻が幼虫を集めているのを

見に行こうと考えました。夫はこっそり妻の様子を見に行きました。夫が耳をすますとドゥーという音が聞こえ、見ると、妻が2匹のサゴ幼虫を捕まえ、1匹を自分で食べ、もう1匹を網袋にいる赤ん坊にあげていました。赤ん坊を見ると、ウーエ、中から男の口ひげが見え、口を開けてサゴ幼虫を食べました。歯が真っ黒でした。夫は家に帰りました。石蒸し焼きを取り出し、網袋に入れて炉の上の棚に置くと、妻が子供と帰ってきました。子供は「アー」「アー」と「口を開けて食べ物をもらいながら」、帰ってきました。夫が「幼虫はどこだ?」と聞くと、「幼虫は料理できません。いい幼虫がいませんでした」と言いました。夫は「水が飲みたい。おまえは何も持ってこなかったのなら、水を汲んで来てくれ。ここから山を越えて、次の山を越えて、その次の山を越えたところの[きれいな] 川の水を汲んできなさい」と水を汲む竹を渡しました。「エー、夜中になってしまうから、夕食を食べましょう」「子供はそこに置いて行きなさい。私が面倒を見るから」「いいえ」「いいや、置いて行け。私はここにいるから、汲みに行け」と言い争い、言い疲れて、妻は「赤ん坊を入れた」網袋を家の中に吊して、樹皮布で覆って出かけました。石蒸し焼きに使わなかった石が3つ残っていました。夫は石を焼きました。妻は山を登り下り、登り下りました。夫は、妻がよくない幼虫だと置いていったものを2つ葉にくるんで炉で焼きました。片手にサゴ幼虫を、もう片手に熱い石をはさんで持って行き、網袋の中を見ると、ウーエ、中には子供に化けた男がいました。「幼虫をあげるから、口をアーしなさい」と言うと、口を開けたので、幼虫をあげ、幼虫をもう一つあげるからアーしなさいと言うと口を開けたので、石を口の中に入れ、その石が喉につまりました。夫はもう一つの石をさらに押し込みました。煙が流れました。男はフーと息を吸い、「二人で暮らせ。おれは死ぬ」と言って死にました。妻が帰ってくる間に、夫はハリネズミの背中に火のついた薪を縛り付け、ハリネズミを持って逃げ出しました。妻の「何をしたの?」と言う声が途中で聞こえました。「アエー、行くな!」という声が聞こえました。夫は走り、走り、カヌーに乗って、どンドン（セー）漕ぎ、村の家の階段を上がり「イー、殺される! 戸を開けて! 戸を開けて!」と叫ぶと、妻が「追い付いて」現れました。「アイー、みんな出かけてしまったのか? 私は殺される。戸を開けて!」と言うと、一人の老人が「ああ、おまえは帰って来たのだな」と言い、「ああ、そうだ。戸を開けてくれ!」。老人が戸を開けると、ソソアカが追い付こうとしていました。その瞬間、夫はハリネズミを投げつけました。妻はそれに目をとられて、そちらに逃げたと思って追いかけたすきに、家の中に逃げ込みました。戸を閉めると妻が追いかけてきて、つまづいて階段に歯をぶつけました。ソソアカは帰り、皆が寝静まるのを待ちました。全員が寝ましたが、老人は眠りませんでした。下からトントン（キリキリ）という足

音が近づいてきました。ソソアカがやって来たのか、と思いました。トゥトゥトゥ、ブルーという音がしました。老人はソソアカが戻ってきたことがわかりました。ソソアカはフーフーフーと匂いをかいで、夫が寝ているところを「床下から」探し、床を牙で破りました。老人は弓矢を持って待ち、ソソアカが夫の心臓を取り出したところを、射ちました。朝、全員が目覚ましましたが、男だけは起き上がりませんでした。老人が「昨日男を誰かが殺そうとしていた。男はそこに寝ていたのか」と聞くと、皆が「そうだ。寝ていた」と言いました。「掛けていた」樹皮布を取ってみると、エゲー、男の心臓のところの穴が開いて死んでいました。老人は「みんな、外を見に行こう」と言いました。「何か落ちている。みんな見に行こう」。そして、下を見ると、ソソアカの死体が男の心臓と一緒にありました。ソソアカを火で焼きました。そして男の遺体は柵を作ってそこに置きました。

フマネ村の近くの大きなオカリナツツの木が生えているところで本当に起こったことです。

3-4 ワサゴ魚 (語り手：カベカ)

あるところに、夫婦が暮らしていました。妻は親族から真珠貝の首飾りやブタ、クスクス、バスケット、網袋をもらうために、出かけることになりました。夫と一緒に来てほしいと頼みましたが、夫が自分に残るから一人で行けと言いました。川の流れが激しいので、一人では「漕ぐのが」たいへんだから一緒に来て、と頼みましたが、夫は嫌だと言いました。それで、若い妻は一人で出かけました。親族からクスクスやブタ、子安貝、バスケット、真珠貝の首飾り、網袋をもらいました。一晩泊まって、カヌーを漕いで帰路につきました。妻は妊娠していました。漕いで行くと、カブドゥが「私を乗せてください」と頼みました。「いいえ、乗せられません」と答えると、「あなたは一人で漕いでいるので、[一緒に漕いであげるから] 私も乗せてください」と言うので、乗せてあげました。川上へと漕いで行きました。カブドゥは巻き貝で水を飲み、貝を落としてしまいました。妻に「水の中に入って、拾ってきてください」と言うので、妻は嫌だと言いましたが、カブドゥがどうしても拾ってきてくれと言うので、水の中に入って行きました。妻は腰みのを脱いで置くと、カブドゥが自分の腰みのを妻に渡して、「それを着けて」水の中にもぐりなさいと言うので、妻は入って行きました。そして、水面が上がってきたところを、カブドゥが懼で妻の頭を何度も打ちつけました。妻は水の中に沈んでいきました。すると、カブドゥは彼女の夫と結婚するために家へ行きました。妻がつけていた腰みのを着けてカヌーを漕いで家へ行き、「妻になりすまして」そこに暮らしました。夫にサゴを料理してあげて、二人は暮らしました。夫はディガソ油（ディガソの木からとれる油性の樹液）を採って、いつも髪に塗っていました。夫はいつもディガソ油を採りに行っていました。

ある日、ディガソを見に行くと油が採られていました。足跡をつけていくと、若い女が体に油を塗っているを見つけました。妊婦が油を塗っていたので、夫がその手を取ると水に変わりました。手の中に水を持っていると、水はシシマノ蛇に変わりました。シシマノ蛇を手の中に持っている、蛇はバツタに変わりました。バツタを手の中に持っている、彼の妻が現れました。「あなたの妻（カブドゥ）が私を沈めたのに、どうして私の手を取るのですか（求愛するのですか）。私は二人で行こうと言ったのに、あなたが行かないと言うので、嫌々出掛けました。私は頭を打たれたので、頭に油を塗るために来たのです」。夫は「エー」と驚いて、妻を抱いて泣きました。そして彼女と一緒に帰りました。カブドゥはサゴを作り、にブッシュへ出かけていました。帰ってきたところを夫は射ちました。すると、ヒクイドリに変わってブッシュへ逃げて行きました。

二人は一緒に暮らしました。妊娠していた妻は、大きな男の子を産みました。ある日、二人はサゴを作りに行き、赤ん坊がウンチをしたので、「ウンチを片付けに来い」と夫が言うと、妻は「はい」と言ったものの来ないので、夫はウンチを片付けて「おまえは水の中に沈んでいた、イソ（水の中に生える植物）に変わってしまったのだな。それで私の言うことが聞こえないのだな」と言いました。妻はサゴを打ち終わり、子供を連れて家に帰りました。サゴを竹に入れて料理して夫にあげ、子供に噛み砕いてあげました。そして「イー、アー、夫が、夫が」と言って、カヌー置き場のところに行くと泣きに泣いてから、家に帰って寝ました。夜、大雨が降り、嵐となり、

イーイーと音を立てました。妻は寝ていました。夫は「妻が川へ行行ってイーと泣いて帰ってきたので、水がやってきて、妻と子供を連れて行ってしまうのだろうか。だから嵐がやってきたのだ」と考えましたが、そのうち眠ってしまいました。夫が眠っている間に、川が妻と子供を連れて行ってしまった。夫が起きると、川が妻と子供を連れて行き、二匹のワサゴ魚がグルグル（ベトアエ、ベトアエ）と水の中を泳いでいました。

3-5 赤いワニ (語り手：クルゴトギ)

昔々、老女と少年が住んでいました。少年が狩でブタやヒクイドリを獲って来て、それを食べて二人は暮らしていました。ある日、少年は悪い夢を見たと言いました。「お母さん、悪い夢を見たので出かけるべきではないけど、狩に行きます。この家にいない方がいいですよ」と言いました。そして犬を連れて狩に行き、犬がヒクイドリか何かを見つけて吠えたので槍を射ちましたが、毛をかすって失敗しました。大きなブタがいたので射ちましたが、射ち損ないました。悪い予感がして、獲物なしに家に帰りました。帰ると、エー、家が燃えていたのので、少年は泣きました。みるみるうちに家は灰となって崩れ落ちました。家の近くの畑まで着くと、灰が落ちていました。さらに家へ歩いて行くと、エゲー、家は燃えてなくなっていました。よく見ると、お母さんの腸だけが残っていたので、少年はへたり込んで泣き続けました。そして、[お母さんを殺した] 弓矢を壊し、カワリ（殴り棒）を壊しました。槍の先をよく尖らせ、一番いいコイバ（石の武器）を選んでよく研ぎ、さらにたくさん槍の先を尖らせ、槍を束ね、大きな弓を選んでしっかり糸をはり、たいへんな仕事をやり遂げました。ブタを殺して石蒸し焼きにし、畑で野菜を採り、野菜とサゴを竹に入れてたくさん焼き、それを食べ、犬にもやって、寝ました。

[翌朝] 少年は武器と食べ物を持って出かけました。大男の足跡をたどって行きました。泣きながら歩き、歩き、歩き・・・どンドン歩いて行きました。夕方になり、一軒の大きな家にたどり着きました。隠れてこっそり見ると、戸口にお母さんの腕の骨がゆらゆら動いていました。隠れていると、大きな若い娘のカブドゥがやってきました。サゴデンプンを入れたバスケットを軽々と持ち、家の中に入って行きました。家の中に入るとき、足の先がひっかかって爪がはがれてしまいました。お父さんとお母さんに何かよくないことでも起きたのだろうか、と考えました。そこに少年が現れました。「戦いに来たの？」とカブドゥが聞くと、少年は「私は敵ではありません。狩で道に迷い、家があったので来ました」と言いました。「それなら、お入りなさい。何も食べ物がないけど」とカブドゥは言いました。サゴとワシア（青菜）を竹に入れて焼いてくれました。少年は「お腹が痛くて食べられません。セゲナボ（薬草）をもらえますか」と言うと、カブドゥは採りに行って戻り、何かを食べ始めました。そして、ひと切れの肉を少年にくれました。それを手に取ると、「おお、私のお母さんだ！おまえが殺して食べたのだな！」と言って、少年はカコイ（石の武器）でカブドゥの頭を打ちつけ、頭は砕けました。「お母さん、天気が悪い。戸をきちんと閉めて寝なさい」と言うと、「はい」「はい」「はい」という声が聞こえ、最後に大きな殺人鬼（*amena hunobo*）の「はい」という声がすると地面が揺れました。

少年は寝て、翌日家を燃やして出かけました。どンドン歩いて行くと、家がありました。キエイメナがやってきて、足の爪をはがしてしまいました。キエイメナはとても痛がりしました。キエイメナは大きなメダメの葉（燃やして塩を取る）の束と大きな赤茶のクスクスを持っていました。おかしな頭の形をしたキエイメナの息子も来ました。少年は[家の外の] サトウキビの後ろに隠れていました。「息子よ、どけ」。「見つかったので」少年は出て行って、武器を置いて、お腹が痛いと言いました。キエイメナは「戦いに来たのか」と聞くので、「私はただブッシュを歩き回っていたらここに着きました」と言いました。少年は家に入り、キエイメナと話をしました。タバコをもらって、長い間話をしました。キエイメナは料理して少年に食べると言いましたが、少年は食べられませんでした。「ぼうず、肉をひと切れ食べな」と言いました。「それは何ですか？」と聞くと、子供が「お父さんが肉をとりに行って、片足をくれました。欲しいですか？」と聞きました。「いや、私の母をおまえの父親

が殺したのだ！」と言って、ボゲ（武器）でキエイメナを殺し、死体は転がっていきました。キエイメナの子供の腹をカコイで突くと、糞がそこら中に飛び散りました。キエイメナの妻がやってきたので、カコイを振り回すと、死体が転がっていきました。それで、少年はクスクスを竹に入れて料理し、彼らが持ってきたものを食べ、お腹がいっぱいになりました。「お父さん、天気が悪い。戸をきちんと閉めて寝なさい」と言うと、「はい」「はい」「はい」という声が聞こえて、地面が揺れました。

少年は眠り、翌朝、残った〔クスクスの〕肉を食べ、家を燃やしました。さらにどんどん歩いて行くと、家が見えました。隠れて見ると、若い娘が二人やってきました。たくさんの魚を入れたバスケットと竹の束を持って帰ってきました。二人は足の爪をはがしてしまいました。イタッ、どうしたんだろう。お父さんたちに何かあったのかと心配になり、家の中に入りました。魚を竹に入れました。少年が見ると、お母さんのもう1本の腕の骨が揺れていました。少年は武器を持って隠れていました。そして少年が出て行くと、二人は「アイー、私たちが殺しに来たのね」と言いました。「いいえ、私は悪い者ではありません」と言うと、「ここに、来なさい」と言ってタバコの束をくれました。竹に入れて焼いた魚を木皿に出してくれました。少年が食べられないと言うと、「こんな小さなものも食べられないのですね。私たちは父が食べるようにと持ってきてくれたものを食べます」と言いました。「おお、私の母だ！おまえたちは殺して食べたな！」と言って二人の娘を殺しました。二人は転がっていきました。「お母さん、お父さん、天気が悪い」と言うと、2回だけ「はい」「はい」という声が近くで聞こえ、最後はかなり遠くから声が聞こえて、地面が揺れました。「静かにしてくれ！」と少年は泣きました。骨に「お母さん」と呼びかけて泣きました。

翌朝、すべてを燃やして、出かけました。歩いて行くと、家がありました。家の裏に回ると、畑にはたくさんの野菜やタバコが育っていました。家の周りには大きな柵があり、何もかもそろっていました。「お母さん、私を守ってください」と隠れていると、大きなカブドゥが男の死体を担いでやってきました。カブドゥの長い髪はおしりも体の前も覆っていました。カブドゥは足の爪をはがしてしまいました。〔少年がこっそり〕見ていると、薪を割り損なって、足を深く切ってしまいました。「そこに隠れている子供がそこで何か食べたのか」と言って、大女は薪で石を焼き、男の死体を石蒸し焼きにしました。少年は隠れていました。そして、蒸し焼きを取り出そうとしたとき、少年は槍を取って脇の下を突き刺しました。槍は脇の下に食い込みました。「おまえは何をした。私と遊ぼうというのか、それとも殺そうというのか」。痛みを感じ、そして死人のような顔になりました。二人は戦いました。少年は「お母さん、お母さんを食べたやつと戦っているよ」と泣きながら戦いました。少年が女を打つと、女が少年を打ち、戦い、戦い、ついに、大女は座り込み、「おまえもそこに座れ」と言って、タバコをくれ、タバコの葉を巻いて竹パイプにつめ、スーッと煙を吐くと、煙がもうもうと立ち込めました。吸い終わ



<写真3 タバコを吸う女性>

ると、「本当の男がやってきた（あっぱれだ）」と言って、再び戦いました。竹パイプでカブドゥの頭を打って竹が壊れ、戦い、少年はカコイを水平に打ちつけました。カブドゥは木が倒れるように床に倒れこみ、少年も疲れて死体の脇に倒れて、長い時間が経ちました。寒さで目が覚めると大雨の中で倒れていました。少年は起き上がって、女の畑の野菜を採ろうとしましたが、戦いで畑はぐちゃぐちゃになっていました。青菜を持って行って、食べて寝ました。

翌朝、少年は出かけて行き、床が高い大きな家がありました。床下に人間の骨がありました。上がって行くと、たくさんの骨が降り下がっていて、お母さんの骨もありました。そして、カテネカテネと音を立てていました。薪の煙が上がっていて、美しい魅力的な娘がそこにいました。少年が現れるとこう言いました。「ハンサムな人ね、なぜここへ来たの？私の父があなたを殺すでしょう。本当に素敵な人、どうしてここへ来てしまったの。走って逃げなさい」。少年

は「いいえ。あなたのお父さんが私の母を殺して食べたので、お父さんを殺すつもりだ」と言うと、「嘘でしょう」と少女は言いました。「本当のことだ。あなたのお父さんが母を殺したので、私も殺そうと来たんだ」と言うと、「いいえ、あなたは殺せないでしょう」と言っているところに、父親が帰ってくる気配がしました。「隠れなさい」と言って、少女は槍の束の中から赤い槍を1本くれました。大雨が降ってきました。少年は武器を持って床下に隠れました。少女の服で体を覆って隠れていると、大男がベルトに小さな子供をさしてやってきました。そして、その子を炉の灰に埋めて、料理して食べました。殺人鬼は、イボでボコボコの醜い顔でした。食べ終わると、男は持ってきた大きなブタを竹に入れて料理して、美しい娘に食べるようにと渡しました。男は薪を割り損なって石斧で足を切ってしまいました。「娘よ、おまえは肉を隠しているな」「いいえ、床下の罠にネズミが1匹かかったので食べたのです」と言うと、「ふしだらな娘だ」と言って、男は外へ出て行きました。そして、男の死体を石蒸し焼きにする準備をしました。外で座ってタバコを吸っているところを、少年は槍で突きました。男は何か蟻でも脇の下に噛みついたのかと思いました。タバコを捨てて男が切りかかりましたが、少年は飛び上がってよけ、大男の体に槍を突き刺し、さらに槍を投げ、何本も槍が突き刺さり、水のように血が流れました。大男は少年に切りかかって、[よけられて]木を切るだけでやり損ないました。二人は石斧を持って戦いました。大男は痛みを感じませんでした。何度も打ち合い、大男が切りつけても、少年は葉のようにヒラヒラとよけました。戦い、戦い、休憩をして、男はタバコを少年にくれました。少年はスースーと吸いました。煙がもうもうと家中に立ち込めて暗くなりました。竹パイプで大男の頭を叩いて竹は壊れ、再び戦いました。「ぼうず、おまえは私と戦えない。おまえのような小さいやつをこれまで何度も殺してきた。それでも戦うつもりか」と言うと、少年は「私の母をおまえは殺したのか?」と言って、再び戦い、大男は少年を打ち、何度も打ち、「おお、ぼうず、おまえは強くなったのか」と言って打ち殺そうとしました。少年は「お母さん」と泣きながら戦いました。そして、少女がくれた[赤い]槍で頭を射ちました。大男は死んで倒れました。死体は赤いワニになりました。少年はそこに寝て、翌朝、少年と美しい娘は結婚しました。そして、ワニを切って、村へ行って人々にあげ、家に戻ってきてまた別の村へ行ってワニをあげ、戻ってきてまた出かけ、とうとうワニを配り終わって帰ってきました。

4. 伝承の分析と考察

3-1では、主人公の少年は、ブタに化身して少年を食べようとしたカブドゥの夫を殺し、カブドゥから逃げるが、逃げた先々の人がカブドゥに殺される。最後に行き着いた家は、超自然的存在の老人と犬が暮らす家だと思われる。犬はカブドゥを殺して食べるが、最後に少年も食べられてしまう。人喰いが犬に化身していたと解釈できる。最後に犬はランに、老人はバジ鳥に変身する。

3-2ではソソアカは天上界から下りてきて、若者を天上界へ連れて行って結婚する⁽⁶⁾。夜妻が心臓を食べると、翌朝地上で人が亡くなっている。心臓を食べるのは人の霊を食べることのメタファーである。ソソアカは霊魂だけでなく、肉体の一部を持ち帰って食べる人喰いである。結末は、夫婦はそれぞれの世界に戻って終わる。

3-3と3-4にあるように、ソソアカやカブドゥが普通の人間の男の妻になりすまして暮らすという伝承がしばしばある。夫婦として暮らしていて、何かをきっかけに本性がわかるという展開が多い。3-3は赤ん坊の本性を見てしまった夫が赤ん坊(ソソアカの夫)を殺し、ソソアカに復讐されるが、ソソアカも夫の仲間に殺されるという結末になる。3-4ではカブドゥに川で殺された妻の霊が姿を現し、真相を知った夫に射たれたカブドゥはヒクイドリとなり逃げる。妻は再び夫と暮らす、最後に魚(霊魚)に姿を変え川底の異界に戻る。

3-5は、人喰いに母を殺された少年が復讐の旅に出て、次々に人喰いたちを殺していく。最後に最強の人喰いを殺してその娘と結婚し、人喰いが変身したワニの肉を夫婦であちこちに分配して物語は終わる。

フォイの伝承における人喰いの意味とは何であろうか。カブドゥ、ソソアカ、キエイメナ、フノボなどは超自然的存在と考えられるが、人間世界に入り込み、人間と結婚して暮らすこともあるなど、その存在は悪を体現するものと

いうよりもっと複雑なものである。物語の展開においても、人喰いは絶対的悪として退治されてハッピーエンドに終わるのではなく、動植物に変身したり逆に人間が殺されたりする結末もあり、混沌としている。「3-1」のように、犬と老人は善なのか悪なのか判然としない伝承もある。また、戦いの展開においても、途中疲れると休憩して人喰いにタバコをもらって一緒に吸うなど、緊迫した場面の合間にこうした場面が織り込まれている点が興味深い。「3-5」では、激しい戦いの末に人喰いを殺すが、それは人喰いの娘からもらった槍を使用して成し遂げられ、人喰いの娘と結婚して終わる。物語の展開は予定調和的には進まない。人間とカブドゥやキエイメナは、対立するだけでなく複雑に交流する。カブドゥ、ソソアカ、キエイメナは絶対的に排除されるだけの存在ではない。善と悪の二項対立的世界観とは異なるフォイの世界観がこうした伝承に見出されるのである。

註

- (1) 会話文では誰が誰に語ったのかは省略されることが多く、わかり難い場合には補足したが、これは[]に入れていない。
- (2) 話の冒頭、ニュアンスをくんで「昔々」「あるところに」という書き出しを加えた。しかし、修正は必要最小限にとどめ、原文にできるだけ忠実に訳すことを心掛けた。
- (3) *kuma'ae* は有袋類のハリネズミ。地中に暮らす。
- (4) 人が亡くなると、一晩中遺体の周りで女性たちが泣いたり、悲歌を歌ったりする。悲歌については槌谷 (1996) 参照のこと。
- (5) 葉は棘があり薬用として用いる。
- (6) 天上界と地下界には地上と同じような世界があり、人間の姿をした超自然的存在が暮らしていると考えられている。異界の伝承は槌谷 (2017) で取り上げた。異界にいる超自然的存在が人喰いである伝承はいくつかある。

謝辞

本論のデータは、1992年から2014年にかけて断続的に実施したフィールドワークによって収集されたものである。1992年から94年までの調査は大和銀行アジア・オセアニア財団（現りそなアジア・オセアニア財団）の研究助成を受け、1996年の調査はトヨタ財団の研究助成を受けることによって可能となった。2014年の調査は科学研究費補助金（課題番号：25884017）を受けて行われた。各機関の支援に感謝申し上げたい。

調査期間中、筆者の日常生活から調査まで、全面的にサポートしてくれた低地フォイの方々には紙面を借りて心からお礼を申し上げる。テープおこしは多くの方々に長時間にわたり根気強く助けていただいた。またアシスタントを引き受けてくれた故ノーマンとフニビには、翻訳に際して大変お世話になった。すべての方々に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

参考文献

- 槌谷智子「パプアニューギニア・フォイ族の歌」『国立音楽大学紀要』第31集1996年101-114頁。
- 槌谷智子『石油開発と「伝統」の再構築 -パプアニューギニア、フォイの土地所有権をめぐる実践-』東京大学大学院提出博士論文、2012年。
- 槌谷智子「語り継がれるもの -パプアニューギニア、フォイの神話・伝承」『国立音楽大学紀要』第47集2012年77-86頁。
- 槌谷智子「語り継がれるもの その2～その8」『国立音楽大学紀要』第48集～52集、54～55集、2013年～2017年、2019年～2020年。
- Murray Rule (1993) *The Culture and Language of the Foe: The People of Lake kutubu, Southern Highlands province, Papua New Guinea*. Port Moresby: CHEVRON NIUGINI, PTY.LTD.